

阿	波	野	青	畝	・	高	野	素	十
日	波	野	草	城	・	富	安	風	生
山	口	青	邨	・	川	端	茅	田	舍
松	本	た	か	・	中	村	草	男	
加	藤	楸	邨	・	石	田	波	郷	
西	東	三	鬼						

日本詩人全集 31

水原秋桜子 他

昭和四十四年 六月三十日
昭和五十四年 五月三十日
発行
八刷



価 600 円

Printed in Japan

1969・6

© SHINCHOSHIA

著者

水原秋桜子 他

編者

森 澄雄 平畑静塔
楠本 憲吉 石原八束
安住 敦 安東次男

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号

一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部東京(26)五一一一

編集部東京(26)五四一一
振替 東京 四一八〇八

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

株式会社 大進堂

【乱丁・落丁木は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。】

目次

水原秋桜子

水原秋桜子・人と作品
(森 澄雄)

二

霜林

四

梅下抄

四

重陽

三

磐梯

三

古鏡

二

葛飾

五

残鐘

七

新樹

七

帰心

九

秋苑

六

玄魚

三

岩礁

九

蓬壺

四

蘆刈

二

旅愁

五

晚華

三七

激浪

五三

殉教

三九

遠星

五五

水原秋桜子年譜

四二

晚刻

五七

山口誓子

青女

五八

山口誓子・人と作品

(平畑静塔)

四五

和服

六〇

構橋

六三

凍港

四九

方位

六四

黄旗

五〇

青銅

六六

炎昼

五二

山口誓子年譜

七三

七曜

五二

阿波野青畝

高野素十

阿波野青畝・人と作品
(楠本憲吉)

高野素十・人と作品
(石原八束)

万両

初鴉・雪片

国原

野花集

春の鳶

高野素十年譜

紅葉の賀

日野草城

阿波野青畝年譜

日野草城・人と作品
(楠本憲吉)

花氷

青芝

二三

昨日の花

二四

転轍手

二五

旗艦後期

二六

旦暮

二七

人生の午後

二八

銀

二九

日野草城年譜

三〇

富安風生

富安風生・人と作品
(安住敦) 一九

草の花

一三

十三夜

一四

松籟

一五

冬霞

一六

村住

一七

母子草

一八

朴若葉

一九

晩涼

一五

雪国

一六

古稀春風

一六

露団々

一五

愛日抄

一三

花宰相

一七

喜寿以後

一五

庭にて

一八

傘寿以後

一七

冬青空

一九

富安風生年譜

一七

山口青邨年譜

一四

山口青邨

川端茅舎

山口青邨・人と作品

(楠本憲吉)

一五

川端茅舎・人と作品

(石原八束)

一九

雑草園

一五

川端茅舎句集

二〇

華巖

三六

野守

四〇

白痴

三三

石魂

四二

白痴以後

三五

火明

四三

茅舎句補遺

三八

松本たかし年譜

四六

川端茅舎年譜

三九

中村草田男

松本たかし

中村草田男・人と作品（平畑静塔）

五一

松本たかし・人と作品（安東次男）

五二

長子

五五

松本たかし句集

五九

火の島

五七

鷹

六〇

万緑

六〇

来し方行方

二六

穂高

二九

銀河依然

二六

雪後の天

二〇

母郷行

二七

沙漠の鶴

二五

美田

二七

火の記憶

二五

中村草田男年譜

二六

野哭

二六

加藤楸邨

起伏

二九

山脈

三〇

加藤楸邨・人と作品

(森 澄雄) 二二

まぼろしの鹿

三〇

寒雷

二五

加藤楸邨年譜

三〇

颯風眼

二七

石田波郷

石田波郷・人と作品

(森 澄雄) 三三

鶴の眼

三七

風切

三九

病雁

三三

雨覆

三三

惜命

三三

春嵐

三三

酒中花

三三

石田波郷年譜

三三

西東三鬼

西東三鬼・人と作品

(平畑静塔) 三三

旗

三九

空港

三三

夜の桃

三三

今日

三三

変身

三三

変身以後

三三

西東三鬼年譜

三三

水原秋桜子

水原秋桜子・人と作品

昭和六年、水原秋桜子は『馬酔木』に「自然の真と文芸上の真」を発表して『ホトトギス』から独立した。俳句に於ける作家の主体性の確立と抒情の回復を希求する秋桜子の、当時の瓊末化した『ホトトギス』の客観写生に対する不満にあったが、直接的には『ホトトギス』に於ける高野素十との作品上の対立、虚子が客観写生に随順する素十を賞揚し、秋桜子を貶したことに端を発している。『自然の真』はそのままではまだ掘り出されたままの鉦で、その鉦を頭の中で鍛錬し、加工して、個性の表現としての『文芸上の真』にまで到達しなければならない」という論旨は、今日必ずしもさして新しいものではないが、子規以来客観写生を伝統とする『ホトトギス』の流れにあって、やはり革新的な意義をもったし、また『ホトトギス』がそのまま俳壇でもあった当時、教皇虚子に弓をひくことはまさに宗教改革的勇気が必要としたのである。だが、当時の新しい俳句青年達を魅了して、真に革新的な意味をもったのは、その前年に刊行された秋桜子の処女句集『葛飾』であった。大正十一年頃から昭和五年初めまでの句を収めた句集『葛飾』は、いまでも秋桜子愛著の句集であり、それは近代俳句革新の句集であると同時に、その完成された典雅豊麗の句境は、既に昭和俳句の古典といっているものであろう。

大正末年から昭和初めにかけては、大正初期の、鬼城・石鼎・蛇笏・普羅を輩出したホトトギス第一期の興隆期につづく第二期の興隆期であり、所謂四S——秋桜子・誓子・青畝・素十が『ホトトギス』誌上に新風を送った時代である。中でも秋・誓二氏は、万葉語と短歌の調べを俳句に導入、その清新な浪漫的作風は「万葉調」と呼ばれ、殊に秋桜子の典雅流麗な作品は「葛飾調」と世に称された。

葛飾や桃の籬も水田べり

葛飾や浮葉のしるきひとの門

連翹や真間の里びと垣を結はず

梨咲くと葛飾の野はとの曇り

など、これら豊潤な作品は、これまでの俳句の寂・栗を伝統としてきた、おおむね老人趣味的な、室内芸術的な暗い陰湿な空気の中から、急に明るく柔かな春の外気と光の中にでてきたような感銘を与える。例えば、それは絵画の暗い肖像画などの世界から、やわらかな光と色彩の織りなす初期印象派のマネやモネの明るい風景画に接したような。秋桜子の手柄もまた抒情の解放とともに、俳句を明るい外光の中に置いたことにある。最後の「梨咲くと」には目解の文章があるのでひいておこう。

『梨咲くと』は、『梨の咲く頃となったので』というほどの意味。また『との曇り』は、『おおらかにぽうっと曇っている』ことである。

私は、小学校時代、中学校時代、高等学校時代を通じて、何回か葛飾へ行っているので、その頃の

美しい景が頭の中にこびりついている。後年、俳句を詠むようになってからの葛飾は殆ど変貌して、美しさを失っていたが、私は昔の美しさを忘れることが出来ず、現在の景の上に、思い出の美しさを重ねて詠んだ」(『自選自解・水原秋桜子集』)

葛飾はまた万葉の赤人が詠んだ真間の手古奈の伝説の地でもある。少年時代の回想の中にある美しい葛飾風景とともに、ここには万葉のおおらかな東^{あづま}ぶりの風景もイメージとして重なっている。先の「自然の真と文芸上の真」とともに、この自解の文章にも秋桜子の創作態度と俳句発想の機微が語られているが、句集『葛飾』に多い大和の古寺・古仏を詠う豊麗の句も、飛鳥^{あすか}・白鳳^{はくほう}の文化への憧憬に彩られた秋桜子の浪漫的な理想美の顕現であろう。

「完全なもの、純粹なもの、美しいものを希ふ芸術家本来の希求が、彼に於ては潔癖なまでにあらはであつて、客観として存在する風景から、彼の観念の中にのみ存在するより、純粹にして完全な風景画を導き出すのだ。風景が彼の観念を模倣せねばならぬ、これが彼の風景の愛し方だ」(『現代俳句』)

これは秋桜子俳句の本質を語る山本健吉の言葉だが、この秋桜子俳句の本質はその後一貫して変らな

る。
『新樹』『秋苑』は『馬酔木』独立後の新展開を示す句集。この頃、秋・誓二氏によって連作俳句が唱導され、この二句集は殆ど連作俳句によって埋められている。だが連作俳句はやがて澎湃^{ほうはい}たる無季新興俳句を呼び起し、また一句の独立性を弱めるところから、昭和十年頃ようやく連作俳句への反省が起る。本巻では連作俳句はすべて解体して一句独立の句として編集した。

以後『岩礁』『蘆刈』『古鏡』『磐梯』『重陽』『梅下抄』の諸句集がひきつづいて刊行されるが、これら戦時中の作品においても、清麗典雅な秋桜子俳句の本質は少しも変わらず、むしろ洋画的な多彩と華麗を加えてゆく。だが『重陽』（昭和十九年―二十二年）の時代は、おおむね順調であった秋桜子の生涯に於ても最も不遇な時代であろう。昭和十九年次男富士郎を失い、翌二十年には空襲によって病院・住宅を焼失、八王子加住の丘に疎開する。句もどこか悲愁を湛えて銷沈の色が濃い。だが、この不遇蟄居の孤独な日常生活の中に、漸く迎えた老の寂寥と自覚を加えて、作家的沈潜は深まり、句集『霜林』、つづく『残鐘』『帰心』の充実と飛躍の時期を迎える。『霜林』の「野の虹と春田の虹と空に合ふ」「べたべたに田も菜の花も照りみだる」等はその気力の充実と芸の回春を、また「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」「雨に獲し白魚の嵩哀れなり」等は、年齢の孤寂にいよいよ観照の澄みを加えた作家精神の沈潜を物語るものである。

『帰心』以後『玄魚』『蓬壺』『旅愁』『晩華』『殉教』とつづき、『葛飾』以後十七冊の句集を重ね、昭和三十九年には芸術院賞を受賞、さらに四十一年には芸術院会員に推され、現在七十七歳、なお矍鑠かくしやくとして旅の大作を重ね、作品はいよいよ典雅に清明を加え、時に清品淡泊のユーモアをまじえた芸の優遊を現じている。

本巻に収めた句は、以上の句集初版本を底本とした。

一九六九年四月二十五日

森 澄 雄